つぶやき～思い出の記録～

平成15年ＮＰＯ設立から10年、札幌森友会から23年歳月が経過しました。手をかけた森のどれもが大きな成果として確実に蘇っていることに、改めて感慨深いものを覚えます。

「北海道を舞台に森林保護に登山に と幅広く活動を展開されていることに感動いたしました。長期にわたって続いたことは、会員の努力はいうまでもなく、現代の必要に裏打ちされているからだと思います。長期的展望をもって、小学校まで取り込んで人材を育成されているのですね。資源小国といわれるに日本ですが、森林や水は貴重です。貴兄のご検討を応援したいと思います。」今、私たちの活動はインターネットを通じて全国津々浦々まで届けられているのです。

第30号　（２０１３・12・20）

久しぶりに開催された小学校のクラス会で元担任の教師と教え子が、ユーモアたっぷりの会話を交わした時の話を聞きました。久しぶりにお目にかかった先生のお元気なこと、一回り以上の年の差を感じさせないのは何故だろう。思わず「先生の若さの秘訣は何ですか？」教え子が訪ねたところ　「なぜ、そんなに元気か　」とよく聞かれます。「一に教育」「二に教養」と返事が返ってきました。歳を重ねても衰えることのない弛まぬ勉学の精神に、ただただ敬服・感心し、また一つ教え乞うたと思いましたが、そこにはもう一つ違う意味が隠されていました。「教育」とは、「今日行くところがあること」「教養」とは「今日用事があること」と話が続き、常日頃家に閉じこもらずに「外に出て人に会い、話をしなさい」ということだったのです。歳を重ねるごとにむしろ元気になっているのではと思うくらい勢いのある人、皆さんの周りにもいらっしゃいませんか？。

蝦夷地のなつかしの小径「フットパスウオーク」で北の大地を発信しましょう。ぜひ一緒に、ふるさとの小径を歩きませんか。普段見る事が出来なかった風景から、思いがけない何かが見つかるかもしれません。「今日行く」と「今日用」で、いつまでも若さを維持し、日々健康で過ごしたいものです。

第31号　（２０１４・６・20）

早いもので来年は学校林・げんきの森づくりがスタートしてから10年目の節目の年を迎えます。毎年継続して手を加えて、地ごしらえ・植樹・下刈りと作業範囲も森の奥まで広範囲になりました。植え付けした木々も学校林にふさわしく、以前は見る事の無かったツツジやエゾヤマザクラも植えられて、今では見違えるほど素晴らしい森に生まれ変わりました。来年には「小鳥の村」や「こまおかの森」でお花見ができる日も現実的となり楽しみが待たれます。

ボランティアの森林づくりの情熱を傾けて歩み続けた23年、その実績は「平成27年度地域環境美化功労者」表彰として栄えあるごほうびをいただき、前号33号のトップ紙面でお知らせすることができました。何よりも多くの森の友・山の友、長年一緒に汗した元会員から改めてお祝いのお言葉をいただき感謝に堪えません。

第34号　（２０１５・12・20）

「私の祖父は札幌市立藤の沢小学校の卒業生で佐藤儀作です」。故郷の子どもたちがスクスク元気に育ってほしいと母校にスギの苗木を贈ったことを聞いて育ちました。近々予定している北海道旅行の折、ぜひそのスギの木を訪ねたいと思いますが「その場所はどの辺でしょうか？」ホームページの投稿欄に書き込まれた文面にびっくり。即事務局から返信メールを送りました。

来道されたご家族は3世代（子・孫・曽孫）感動のご対面が実現したのです。あの儀作スギが見事に成長し天高く聳え立つ姿を眺め、木肌にほおずりする姿に体中からこみ上げる高まる心音と熱いものを共有する機会が得られ思いがけないひと時になりました。

第36号　（２０１６・12・20）

（Ａ、Ｙ）

さっぽろふるさとの森　（平成21年）

さっぽろふるさとの森　（平成23年）

樽前山麓樹海再生の森（平成24年）

編集後記（最終号発行に寄せて）

平成23年（２０１１年）発行の創立20周年記念誌で代表小林文男は、平成3年の新春に、森を愛し、森に親しむ同志10数人が集い「札幌森友会」が発足し、「森づくりやアウトドアーの活動を続けているうちに、20年の歳月が経ちました」と、晴れ晴れと感無量の挨拶文を記した日のことが、つい昨日のことのように蘇ります。

あの日から早や8年が経過、２０１９年を迎え、まもなく平成の時代も終わろうとしています。振り返れば平成10年に創刊した会報「もりのとも」も最終号を宣言することにいたしました。

常日頃会の歩みを記録にとどめながら、私たちの活動をより多くの皆さんにお知らせしたく、「地域の人々とほんものの自然に親しみ、豊かな心と強健な身体をつくり、心身の健康を図ること」を趣旨としての活動は、平成15年5月、特定非営利活動法人の認証を受け、「地域の人々と植樹や育樹のボランティアと、森林遊びを取り込みながらの自然ふれあい活動を行い、子どもたちの森林環境教育として、学校林の植林から下刈り体験と、森林の器具を使っての多様な森遊びを指導する活動」に行動範囲を広げました。

今日まで歩んだ、年度別・作業別の内訳を図表としてまとめました。各関係機関との協定による森づくりも、それぞれに契約期間に区切りがついたことが最も大きな要因です。毎号発行のつど、参加していただいた多くの会員から、たくさんの感動の投稿文をお寄せいただき、各号の紙面づくりに多大のご協力をいただきました。

毎号表紙を飾った挿絵は創刊から第5号まで元会員石塚春江さんが山のスケッチ画を、以降、第6号から浦嶋好江さんの植物画が表紙を飾りました。優しいタッチで描かれたどれもが、添えられたコメントとともに、毎号楽しみに待たれました。また会報誌コンクールでは審査委員から高い評価をいただいたことは記憶に残るところです。第26号からの挿絵を「思い出美術館」として再編集し感謝の気持ちを再掲載いたしました。

第5号から始まった「かいちょう日記」は、その時々の込められた熱い思いが疲れをいやし心を揺さぶられました。最終号発行にあたり、第26号以降からを振返り、会長が森づくりに傾けた情熱の一端を振り返ってみたいと思います。

編集後記は、いつも頭を悩ます編集人に与えられた最も大きな宿題でした。末尾に記した（Ａ、Ｙ）のイニシャルから判断ご理解いただけたなら幸いです。編集委員が持ち回りでとの提案もやむなく却下され、ほとんどが独演会に終わってしまい反省が残りました。その中でも第29号の末尾だけは（Ｍ、Ｙ）さん、大和谷正人理事に助けを求め、腰痛による入院の非常事態を乗り切りました。今だから明かせるマル秘話しです。

3月末のＮＰＯ法人解散に合わせて、設立から28年、法人設立から16年に及んだ活動に幕を下ろします。解散後は、髙橋喜三雄さんを中心に新たなでメンバーで有志を集めて、任意団体で学校林を中心とした残された活動を続ける予定です。高橋さんは「できることは限られるが、あと数年は子どもたちのお手伝いを続けたい」と話しています。元気組のさらなる応援をお願いし、最終号の終わりの言葉といたします。

長い間のご愛読と、貴重なご意見ご感想等をお寄せいただきましたことに 改めてお礼申し上げます。　Ａ、Ｙ

（２０１９、４、10）